

聖書：ローマ 2：17～29

説教題：心の割礼

日時：2015年5月10日

旧約聖書にダビデが主の器として選ばれて油注ぎを受ける記事があります。預言者サムエルが遣わされてエッサイの家に行きますが、初めに長男エリアブを見て心の中でこう言います。「確かに、主の前で油をそそがれる者だ。」しかし主なる神は言われました。「彼の容貌や、背の高さを見てはならない。わたしは彼を退けている。人が見るようには見ないからだ。人はうわべを見るが、主は心を見る。」そして続きを読むと、主が油を注げと言われたのは、何と野原で羊の番をしていた 8 番目のダビデでした。人の見るところと神の見るところは違うことを印象的に教えられるエピソードです。

私たちはお互いの内側までははっきり見ることができません。見えるのは外側だけです。ですから私たちは外側のことをもってお互いを判断し、評価し、さばいています。そして私たちはこのことを逆に自分のためにも利用します。すなわち他の人は私の心の中までは見通せない。ですから大事になるのは外側のことです。肩書き、学歴、社会的地位、職業、どんな家に住み、どんな車に乗り、どんな洋服を着、どんな髪型にするか。実際、それなりの有名な大学を卒業していた場合、何かの話の際に「私は〇〇大学の出身です」と言うのでしょうか。人々は目を丸くして、それまでとは違った目で接するようになるということが起きます。あるいはきれいな人を見ると、その外側の素晴らしさのゆえに内側まで素敵な人であるかのように思います。このように私たちの人間関係は成り立つので、私たちは益々外側に重きを置き、これに寄りかかる生活をするのです。キリスト教界においてもある程度そうでしょう。「私はあの有名な大教会、〇〇教会の会員です。」とか、「あの〇〇牧師から洗礼を受けました。」と言うと、人々はオー！と驚いて、そうでなかった場合とは違う態度でその人に接するようになる。何かそれで一つのステイタスがあるかのように、それで立派なクリスチャンであるかのように、お互いが思いながら話をするのです。しかし神はどうなのでしょう。やがてのさばきの日に、「あなたはあの〇〇教会の〇〇牧師から洗礼を受けたのですか。ではどうぞこちらの天国へお入りなさい。」などということはないのです。人はうわべを見ますが、主が見ておられるのは、その人の内側、隠れた実質です。

このローマ書 2 章でパウロが語りかけている相手はユダヤ人です。1 章では異邦人の

罪に対する神の怒りとさばきが語られました。それを見てユダヤ人たちが、「アーメン！その通り！」と同調したであろうことは容易に想像できます。しかしパウロはユダヤ人に向かって、「あなたは神のさばきを免れると思っているのですか。」と 2 章 3 節で言いました。なぜユダヤ人たちは、自分たちはさばきを免れると考えたのでしょうか。それはうわべだけを見ていたからです。今日の箇所の問題にされているのは「律法」と「割礼」です。ユダヤ人にはこれらが与えられています。これらは彼らにとって宝です。これらを持つ我々がどうして神にさばかれるだろうか！と彼らは思っていました。しかし神はどう見ておられるのか。

まず 17～24 節は律法についてです。17 節に「もし、あなたが自分をユダヤ人となえ」とあります。ここにユダヤ人であると「となえる」「名乗る」とありますように、ここにも一種のステータスがあるのです。我々は他の異邦人とは違い、神に選ばれたユダヤ人だとの自負がこめられているのです。その彼らには何と言っても「律法」が与えられていました。彼らはこの律法を通して「神」を知っています。そして神の「御心」を知っています。「なすべきことが何であるかをわきまえて」います。また「知識と真理」を持ち、他者を照らす「光」を持っています。この律法を知らず、暗やみの中にいる愚かな者たちを導き、教えることができます。これはユダヤ人に与えられている特権です。神は彼らを選び、彼らを通して世界にご自身を知らしめ、救いの輪を広げて行くように計画されました。しかしそのユダヤ人たちの問題が 21～23 節で指摘されています。「どうして、人を教えながら、自分自身を教えないのですか。盗むなど説きながら、自分は盗むのですか。姦淫するなど言いながら、自分は姦淫するのですか。偶像を忌みきらいながら、自分は神殿のものをかすめるのですか。律法を誇りとしているあなたが、どうして律法に違反して、神を侮るのですか。」 ユダヤ人たちは真理を知り、人に教えてはいましたが、自分には教えていませんでした。2 章 1 節 3 節にも、彼らが他人の罪を上からさばきながら、それと同じことを自分たちがしていると言われていました。もちろん全員が全員、ここにあげられている盗みや姦淫、神殿のものをかすめ奪うことなどをしてはいたわけではないでしょう。しかし当時のラビの文献には、ユダヤ人たちの間に殺人や姦淫、商業や裁判における腐敗、グループ間の争い、その他の悪が増加していることを嘆いているものが見られます。そのため、24 節にありますように、神の名が異邦人の中で汚されているという現実があったようです。そんな彼らに、単に律法を持っているだけではダメであること、それを知っているだけではダメであること、そこに生きていなくては何の意味もないことをパウロは指摘しています。私たちも同じように聖書の御言葉を知っているだけではダメなので

す。その内容に精通し、色々な判断ができるだけではダメなのです。まず自分自身がそこに生きる者でなくてはならないのです。

しかし私たちはここを読んで、単に「律法を知っているだけではなく、そこに生きる者とならなければならない」というメッセージを読み取れば良いものではありません。パウロはここで、ちゃんと歩みなさい！そうすれば異邦人をさばく資格も出て来るよと言っているのではないのです。結論から先に言えば、罪に堕ちた私たちは生まれながらの力では神の律法を完全に正しく守ることはできません。ですからこれと真剣に向き合うなら、自分の罪深さに直面するはずです。自分は自分を救えない、どうしようもないあわれな者だと気づき、うめくはずです。そうしてこそ、神が差し出してくださっているイエス・キリストにある救いへと導かれるべきでした。パウロもそのように導こうとして、これらのことを書いているのです。律法を真剣に自分に当てはめ、自分こそ救われなければならない者であることを自覚し、助けを求めるようになることこそ大切なことなのです。

後半の 25～29 節は割礼についてです。この割礼はユダヤ人の祖アブラハムに遡るもので、神と契約を結んだ民のしるしです。ユダヤ人はこの契約のしるしを自分たちは持っているから救われると考えていました。しかしパウロは 25 節のように言います。「もし律法を守るなら、割礼には価値があります。しかし、もしあなたが律法にそむいているなら、あなたの割礼は、無割礼になったのです。」ここに割礼という「しるし」は、律法に従う生活という「実質」と結び付いていなければならないと言われていきます。実質がないのにしるしだけ誇るのはナンセンスであると。これはたとえば結婚関係における結婚指輪にたとえることができます。結婚指輪は二人が実質的に結ばれていることの目に見えるしるしです。そしてそのしるしは当然、夫婦としてのお互いの誠実があって初めて意味を持ちます。ところがもしある人が外で姦淫の生活をしつつ、なお指輪をはめているという状況があったらどうでしょうか。やがてそれにその人の妻に明らかになります。そして責められた時に、夫が「ちょっと待ってください。でも私は指輪は付けています。」と言ったところで何の意味があるでしょうか。実質がないのに、しるしだけ主張してもナンセンスです。割礼も同じです。実質が大事なのです。

ですから 26 節でパウロは「もし割礼を受けていない人が律法の規定を守るなら、割礼を受けていなくても、割礼を受けている者と見なされないでしょうか。」と言います。ここでは異邦人クリスチャンのことを考えたら分かりやすいと思います。彼らはその身に割礼はなくても、実質的に神の御心にかなう歩みをしているなら、割礼を受けて

いる者、すなわち神の民と見なされるということです。27 節ではその人々があなたをさばくことになるともあります。ユダヤ人は将来、神と共に異邦人をさばくと考えていました。しかし彼らが見下していた異邦人がまことのユダヤ人となり、あなたがたユダヤ人たちを反対にさばくというどんでん返しが起こることにならないだろうか、ということです。

28～29 節：「外見上のユダヤ人がユダヤ人なのではなく、外見上のからだの割礼が割礼なのではありません。かえって人目に隠れたユダヤ人がユダヤ人であり、文字ではなく、御霊による、心の割礼こそ割礼です。その誉れは、人からではなく、神から来るものです。」ここにユダヤ人の再定義があります。ユダヤの国に生まれたから、自動的に神の民なのではない。神は外側でなく、内側を見ておられるのです。ですから私たちも外面上のことより、そこに実質があるかどうかを何よりも問わなければならないのです。割礼も同じです。大切なのは肉体にそのしるしがあるかどうかではなく、心の割礼です。これは旧約時代から言われて来ました。申命記 10 章 16 節：「あなたがたは、心の包皮を切り捨てなさい。もううなじのこわい者であってはならない。」包皮が取り除かれていない心とは、閉じられていて神の進入を許さない心のことです。しかしその邪魔しているものが切り取られるなら、割礼を受けた心は開かれ、障害物が取り除かれて、真心から神と交わり、神に導かれるようになります。またこの心の変革は神が与えてくださる恵みであることも語られて来ました。申命記 30 章 6 節：「あなたの神、主は、あなたの心と、あなたの子孫の心を包む皮を切り捨てて、あなたが心を尽くし、精神を尽くし、あなたの神、主を愛し、それであなたが生きるようにされる。」ですからこの心の変革においては神に求め、神により頼まなければなりません。ローマ 2 章 29 節でも「文字ではなく、御霊による、心の割礼」とありました。そうしてこそ私たちの心は神のきよめを受けて柔らかいものとされ、神に対して新しく心が開かれた者、生まれ変わった者としてのいのちの歩みが始まるのです。人はこの内側のことが見えず、その価値を認めないかもしれませんが、神はこれを尊び、これこそを賞賛されるのです。

今日の御言葉から学ぶことは、神は私たちの内側の実質を見ておられるということです。私たちがどんな立派な学校を出て、どんな立派な家に住み、どんな収入を得、どんな評判を人から得、どんな良い暮らしをしているかということに神は少しも感服されない。信仰の事柄においてもそうです。先ほど肉体だけの割礼は真の割礼ではないと言われましたが、旧約の割礼に対応するのは新約の洗礼です。ですから私は洗礼を受けているから大丈夫とは必ずしも言えないということになります。もちろん洗礼

は見えない霊的実質を指し示すものです。またこれは私たちの信仰生活の助けであり、力強い補助手段です。イエス様が、信じた者はこれを受けなさいと命じておられますから、私たちはもちろん感謝してこれを受けます。しかしこの外面的なしるしにだけ満足して、実質をないがしろにしているなら、それは何の保証にもならないのです。あるいは聖餐式でいつもパンとブドウ液にあずかっているから、私は大丈夫ということも言えない。神が見ておられるのは、それを受けているあなたに実質はあるのか、神が良しと認めるものがそこにあるのかということなのです。

ですから私たちにとって大事なことは、外側のことに満足するのではなく、自分の内側を神の御前で省みることでしょう。神との一對一の交わりにおいて、自分はどうなのか。心を見ておられる神の前で賞賛を頂ける者なのか。そうして神に導かれて、「私は、私のうち、すなわち私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています」と告白することが大事ではないでしょうか。「私はほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。」と叫ぶことが大事ではないでしょうか。そのように導かれることこそ、この箇所を書いたパウロの目的です。そういう者に3章21節以降で「神の義」が差し出されることになるのです。私たちが外面的なものにより頼むのではなく、神が私たちに与えて下さる恵みにこそ、より頼むことができますように。そこに私たちの真に新しい歩みがあります。心の包皮を取り除かれ、神に対して開かれた新しいいのちの歩みがあるのです。その人目に隠れたユダヤ人こそ、神の御前における真のユダヤ人であり、神が賞賛する人なのです。